レポート

REPORT 01 peace nine展

2009年5月15日[金]− 5月20日[水]
名古屋芸術大学アート&デザインセンター(ギャラリーbe)

今年で3回目となる「peace nine展」は、名古屋芸術大学九条の会と名古屋芸術大学美術学部・デザイン学部同窓会の後援を得て開催することができました。

国民投票法案が成立して後、日本国憲法第９条を変えよう、という世の中の動きが強まっているように感じるなか、第９条こそが私たちを、戦争の被害からも加害からも守ってくれているのだと思います。この危機感を孕んだ現在を見過ごすことができず、私たちは、第９条を守ろうというメッセージを、美術を通して発信するため、展覧会を重ねています。

今年は１名の学外の作家に加え、大学院生２名と、教職員３名、卒業生作家が２名、計８名が賛同し、出品しました。展示の内容は、版画などの平面作品に加え、初回から出品して頂いている佐藤浩先生の、賛同するひとりひとりがメッセージを書きこんだ小さなシールを貼ることによって９を形作る作品や、平和の象徴である小さな鳩を観客に持ち帰ってもらう、服部奈奈さんの『どこでもぽっぽちゃんと〜愛のミルクをあげましょうね』と題された作品など、観客参加型の作品や、生の野花で作られた大嶽恵子さんの『千草帯(せんそうほうき)』など、様々なアプローチで、それぞれの作家が等身大の想いをかたちにした作品が寄せられました。

回を重ねる毎に関わる作家も増え、また関わる深度も増しています。また学内外から毎回見に来て下さる観客や、展覧会のために協力してくれる学生も増えました。昨年は芸大祭でPeace Oden 9(P.O.9)という店を出店し、多くの方のご利用により、展覧会の運営資金を集めることができました。また、クリエ幼稚園の園児が描いた絵を、Tシャツにプリントし、関わりのある方々が資金協力のため

右:大嶽恵子「千草帯(せんそうほうき)」

購入して下さったことによっても、多くの費用を集めることができました。このように、沢山の方の「平和」への関心によってこの展覧会は成り立っています。

この「peace nine展」は、昨年には、核廃絶を願う「コスモス日進」さんの呼びかけで、日進市主催の平和展に巡回することができ、今年もこの巡回事業は継続されます。※こうして学内だけでなく、学外にも、関わりを持ち、多くの人々が繋がってゆきます。

私たちは武器によってではなく、美術の力によって人と繋がり、「平和」をつくり出してゆきたいと願っています。

長谷川直美(peace nine 展実行委員／本学美術学部非常勤講師)

※「peace nine展」巡回
7月24日(金)—26日(日)「平和の集い2009」(日進市市民会館)

予告

FUTURE EVENT 01 素材展

昨年度の展示風景

2009年7月31日[金]— 8月5日[水]

デザイン学部クラフトブロックのメタル＆ジュエリー選択コースとテキスタイルデザインコースによる企画。
2〜4年生による前期課題の作品を展示し、さまざまな“素材”の可能性が示されます。

FUTURE EVENT 02 ア" ーッ!ラジオ a"aarts RADIO!

2009年10月19日[月]— 10月21日[水]

美術学部(洋画コース)による企画。「仮設 − 構想領域研究室」主催にて、ユニークで実験的な展示＆イベントを仕掛けます。
今回は、三日間限定で公開ラジオ放送「ア"ーッ!ラジオ」と関連展示を開催。
お聞き逃しなく!

2009 6-10 EXHIBITION SCHEDULE

Open 12:00—18:00(最終日は17:00まで)日曜祝日休館　入場無料　どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

6 /26 金→	7 / 1 水	洋画2コース選抜展
7 / 3 金→	7 / 8 水	名古屋芸術大学前期交換留学生作品展
7 / 3 金→	7 / 8 水	マット・ソス個展
7 /10 金→	7 /29 水	2009年度企画展　美術セットに見る1980年代ミュージックシーン展
7 /31 金→	8 / 5 水	素材展
8 / 6 木→	9 /14 月	夏期休館
9 /15 火→	9 /19 土	一人称展
9 /24 木→	9 /30 水	To soft sculpture
10 / 2 金→	10 / 7 水	フィリップ・ブース 2002-2009, A JAPANESE RETROSPECTIVE
10 / 9 金→	10 /14 水	JAGDA新人賞受賞作家作品展2009
10 /19 月→	10 /21 水	ア" ーッ!ラジオ　a"aarts RADIO!
10 /23 金→	10 /28 水	大学院洋画制作展
10 /30 金→	11 / 4 水	美術学部コース展(仮称)

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行一準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

大学基準協会認定マーク
本学は2006年4月に認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。
認定期間は2006年4月から2011年3月までです。
これによって法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。

Art & Design Center
名古屋芸術大学アート&デザインセンター　〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 tel.0568-24-0325 tel/fax.0568-24-2897

B!e Vol.25
発行日　2009年6月25日
発行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
E-mail adc@nua.ac.jp　URL http://www.nua.ac.jp

2009 Printed in Japan © Art & Design Center, Nagoya University of Arts

デザイン／印刷　サンメッセ株式会社

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
B!e NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS ART & DESIGN CENTER NEWS
2009. Vol.25

音楽を観る

Watch the Music

空間のマジシャン

「音楽を絵にする」——自分の仕事について聞かれた三原康博さんは、いつもこんなふうに答えている。その言葉の通り、これまで何百、もしかすると千曲以上の音楽を「絵」にし続けて来た。

テレビの音楽番組が花盛りの頃、そこには三原さんが「絵」にした音楽が溢れていた。「ザ・ベストテン」や「輝く!日本レコード大賞」、「東京音楽祭」といった名物音楽番組の様々な場面を思い浮かべると、不思議なことに、音楽と共にそこにあった風景が鮮明に思い出される。三原マジックだ。

そして、三原マジックに魅了された数多くのアーティストが、当然のように、三原さんにコンサート・ステージの美術を依頼した。テレビの枠を飛び出した「音楽の絵」は美しく、ダイナミックでユーモアとドラマに充ち満ちていた。しかも三原さんはジャンルを問わなかった。ロックの次に演歌、演歌の次にニューミュージック、ニューミュージックの次に新派、大衆演劇、オペラ、ミュージカル…。手を変え品を変え、三原さんはバラエティーに富んだ音楽の風景を次々と誕生させて来た。

その始まりは意外にも普通だ。打合せをしながらスケッチブックに何本もの線を走らせるところからアイデアを固めて行く。そして、概要が出来上がると決まって書き込むのが人間。三原さんのスケッチには必ず人間がいる。美術のための美術ではなく、人間がいることによって初めて成立する美術、それが三原ワールドの最大の特徴だろう。

そして、ついに模型が登場して来る。ここにも小さな人形がいる。絶妙な仕上がりの模型につい魅了されてしまうのだが、演出家にとっては、この模型こそが実は曲者なのだ。「騙されるんじゃないぞ。これはあくまでも模型だ。実際のステージではこうはならない。絶対にならない。これは三原さんの夢だ」と思いつつ、いつも決まって騙されてしまう。

しかも、この騙し方が、口惜しいけれど、いいのだ。実際のステージで、模型の中にいた小さな人形が人間に代わるように、三原さんの美術も生き生きと呼吸し始める。三原さんの美術が生き物になっているのだ。こうしていつも、やられてしまう。

「三原康博は最高の詐欺師だ」と申し上げたら、こんな返事が返って来た。「所詮は鉛筆と紙と糊で作り上げた図画工作の世界なんだから詐欺と言われても仕方がない。だけど、詐欺師としては美術家の上を行く演出家にだけは言われたくないね」。

三原さんと出会って、二人で詐欺師稼業をご一緒させて頂いて三十年。今のところは誰からも訴えられていないのが幸いだ。

音楽学部　音楽文化創造学科 教授　森泉博行

音楽を観る
Watch the Music

“発想のかけら”を組み立てる

極端な言い方ですが、舞台は役者のモノ、映画は監督のモノ、テレビは視聴者のモノと私は思っています。音楽番組担当のTV美術家は、歌手と音楽のイメージに従って造り上げた設計図に、色や寸法を具体的に指定し、現実のセットとしてスタジオ内に表現しなければなりません。

その時重要なのは、曲をどのように感じて表現するのかと言う事です。美術教育を受けてきた者として、表現する手法にこだわってしまうと曲のイメージがどこかへ行ってしまいがちなのです。

縮尺模型から実物大セットを作り上げるには、多くの職人さんと呼ばれるプロたちの作業の積み重ねが欠かせません。常に制作時間やコストと言った制約を受けますが、私の仕事はそれらの条件をクリアしながら完成させていく目的美術なのです。画家が、自分自身で表現したいテーマを選び、心の赴くままにキャンバスに絵を描いていくのとは違うのです。

現在、名古屋芸術大学ミュージカルコースで客員教授として、毎年学生達の卒業公演での美術を担当していますが、そんな学生達からよくこんな質問を受けます。「美術セットを発想するときの拠り所は何処にあるのですか？」

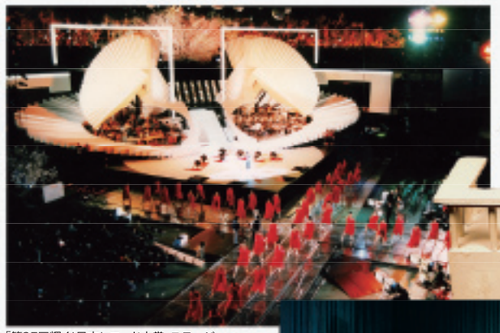
一口で答えられることではありませんし、まだ自分でもこれと言えるものが分かっていません。自分らしい答えを模索中です。ただ、一つ言えるのは、テーマに直結するようなアプローチはなるべく避けると言う事です。

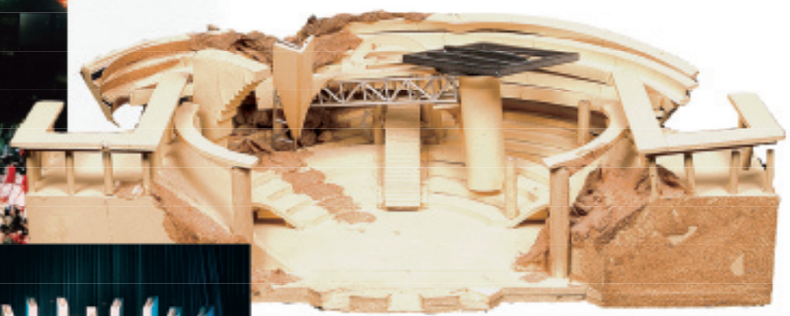
かつて学生時代に、インダストリアルデザインの教授から、扇風機のデザインを考える時にデパートの扇風機売り場へだけは行くなと言われた事があります。この忠告が今も私のベースにあると言えます。

また、瀧口修造氏の『造形的実験』という本に出会って、共鳴を感じつづけています。万年筆のブルーブラックのインクについて「ややもすると地獄の空の色・・・」と記されていますが、紙面に落ちた一滴のインクによって広がる世界はただの「シミ」ではなく、「宇宙」を求める心には「宇宙」に、「神秘的な海」を求める者には「神秘的な海」に見えてきます。

そのような「発想のかけら」の積み重ねの中から、歌手の声や曲、歌詞に見える世界の中に自分と共鳴する部分を拾い出し組み立てて、私は一気に模型へとして創り上げていくのです。

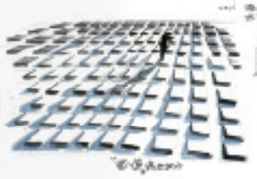
三原康博　名古屋芸術大学音楽学部ミュージカルコース客員教授

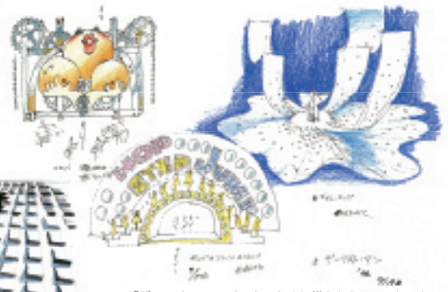

「第27回輝く！日本レコード大賞」ステージ
日本武道館(1985年)


「輝く！日本レコード大賞」ステージ模型　日本武道館

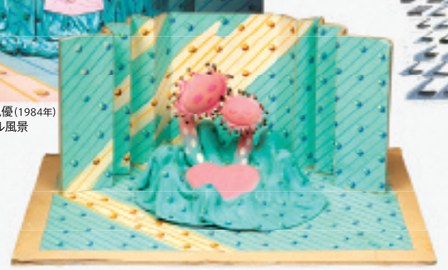
「恋におちて」小林明子(1985年)

「誘惑光線・クラッ！」早見優(1984年)
スタッフによるリハーサル風景




「ザ・ベストテン」のセットのために描かれたラフスケッチ

写真提供：TBS


「誘惑光線・クラッ！」早見優(1984年)セット模型

三原康博　みはらやすひろ
(特定非営利活動法人テレビ日本美術家協会理事長)
1961年東京芸術大学美術学部工芸科図案計画卒。同年TBS入社。主に音楽番組の舞台美術を担当、「サウンド・イン“S”」「ザ・ベストテン」「東京音楽祭世界大会」等のテレビ部門の他、スタジオ以外での舞台をも手がける。日本武道館での「輝く！日本レコード大賞」の舞台美術で伊藤熹朔賞・本賞を受賞する。1997年TBSを退職。現在は美術プロデューサーとして活躍する。

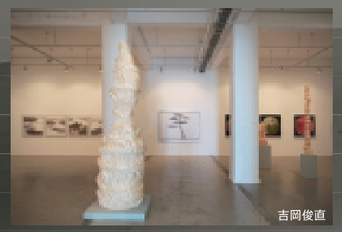
2009年度企画展
美術セットに見る
1980年代 ミュージックシーン展
～ザ・ベストテンから日本レコード大賞まで～
2009年7月10日[金]－29日[水]
12:00～18:00（最終日は17:00まで／7月12日、26日は休館）
会場：名古屋芸術大学アート&デザインセンター
主催：(財)放送番組センター／名古屋芸術大学／名古屋芸術大学音楽学部同窓会
後援：TBS

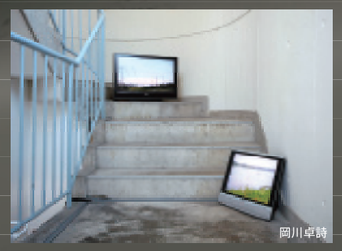
「音楽を絵にする仕事」
名古屋芸術大学音楽学部ミュージカルコース客員教授である三原康博の美術セットデザイナーとしての40年間の作品を展観！
歌番組が輝いていた昭和後期・1980年代の音楽シーンの懐かしいスタジオセットや、ヒットソングの数々が蘇ります。

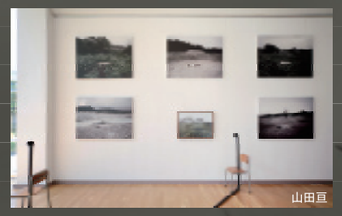
REVIEW

MEDIASELECT 2009　映像メディアのコンテクスト
2009年5月23日[土]－6月2日[火]　名古屋芸術大学アート&デザインセンター

河原崎貴光


吉岡俊直


岡川卓詩


山田亘

「09年5月のコンテクスト」

09年5月に記憶に残る映像といえば、意外なスピードで世界を駆け巡った新型インフルエンザのそれだろうか。渡航経験のない国内感染者発見以前は空港での検査態勢を、発見以降は通勤途中のマスク姿を、メディアでは毎日目にしたものだ（実見することはなかったが）。二つの時期を通して画面に現れ続けていたのが、新型ウィルスそのものの映像である。わたしたちには見えない、テクノロジーだけが可視化しうるこのウィルスにより、またしても、見えない敵との闘いが、人の口にのぼったのである（しかも、いまは弱毒性だがいつ組み替えにより変異するかわからないという！）。

わたし自身、自分がこの地域の最初の感染者になったときのことを考えて、いくぶん不寛容な気持ちになってはいた。が、出張先から名古屋に戻る新幹線のなか、新神戸の手前で何人かの乗客が急いでマスクを着け始めたのには（そして新大阪を過ぎると急にはずして弁当を食べ始めたのを見たときは）、さすがに困惑した。ノー・リスクの幻想というのだろうか。人やモノが交われば必ず何らかのリスクがある、だからこそ意思疎通や適切な情報の交換が必要であり、それを閉ざして自分だけは安全地帯にいるつもりになっても・・・と、自分を棚に上げて思ったのである。

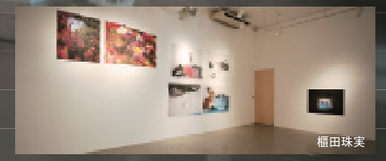
他者がいないままの他者への配慮。コミュニケーションの不在。見えないもののテクノロジーによる可視化映像は、科学的に理解されぬまま解釈され、この不在を助長し、わたしたちを不安に陥れていた。こうしたメディア映像上の現象とその波紋のなか、今回の映像メディア表現に出会う。もちろん両者に直接の関係はない。しかし根源的な作品は、こうした現象と何らかのかたちで響きあう（もちろんそれに尽きるものではないが）。どの作品も、きわめて興味深かった。

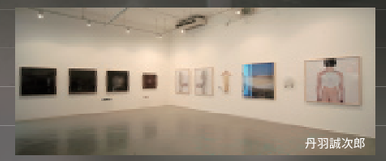
UFOやハッシーなど、メディアの虚実を身近な風景に織り込んで震える動画サイト的作品（岡川）。すれ違いと拒絶にもかかわらず、潜在性としては確実にそこにある、他者との微細な同期の瞬間を捉えた痙攣的作品（武藤）。新幹線に近づいて待ったをかけ、出会いをもたらそうという試みは個人的にとても面白かった。新幹線も痙攣するのだ。

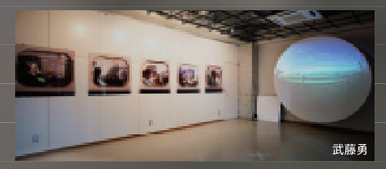
また上に触れたウィルス画像（や脳画像）のような、現代における自然の映像化・情報化の問題は、大崎、吉岡、河原崎の作品と共振していた。研究者なら自覚しているように、科学画像は自然の直接的模倣ではなく、独自のアルゴリズムに拠った理論画像をベースに、一般に受け手が理解しやすい皮膜を施したものである。しかし通常個々人は、それを理論的媒介抜きで直に自己の身体や感情と関連づけるしかない。この皮膜に覆われたアルゴリズムとその身体的解釈の問題は、かたちを変えて、大崎、吉岡それぞれの作品に現れていた。人も山も水も樹木も、常に計算し動き続ける自然のアルゴリズムを内包したダイアグラム的形態が空間上に一時的に配置されたものと考えるなら、彼らの作品に生命を感じるのは不思議ではない。また、強烈な腐臭と芳香が交じり合い映像と擦れ合う河原崎作品も、被覆化された画像と身体を強制的に関連させていた。

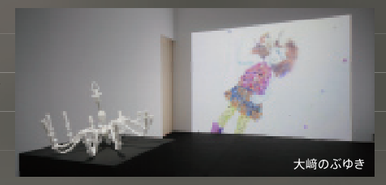
さらに、磁気テープを用いて視聴覚メディアの変換手続きを追体験させ、同時に万能マシンの誕生とその基礎にある「刻みなぞる」触覚的行為に立ち会わせる作品（山田）。そして、映像を解釈するわたしたちに欠けている、別様の関係性・複数のコンテクストの知覚可能性を、極微に問いかける作品（丹羽）。あまりにもいろいろなことを考えさせられた。

秋庭史典　名古屋大学大学院情報科学研究科准教授


櫃田珠実


丹羽誠次郎


武藤勇


大崎のぶゆき

photo：怡土鉄夫

ART WORDS FROM THE ART WORLD

2010
8.21→
10.31

あいちトリエンナーレ2010芸術監督
国立国際美術館館長
建畠 哲
Akira TATEHATA

芸術一話 第1話 若者よ、真の謎を見据よ！

私はアートとはいかにしても定義することができない謎であると思っています。一種の戦慄感を伴った不思議さといってもよいでしょう。しかし誤解しないでいただきたいのは、それはアートにおいて論理的な思考が無効であるということではないのです。自分の作品は言葉なんかでは説明できないよと、論理を放棄してしまうことは、その謎をうすっぺらなものにしてしまいかねない。いつの時代にあっても優れたアーティストは例外なく、徹底的に自らの作品の論理を構築してきました。アートとは感じるものであると同時に思考の形式もあるのです。あいまいな雰囲気におもねるのではなく、言葉にしることの限界までは言葉にすること。もちろんそれですべてが明らかになるわけではありません。しかし限界まで考えることは、その先にある不思議さをより深いものにするのです。

先日、私はフィレンツェのウフィッツィ美術館の「ビーナスの誕生」の前に一時間ほど佇んでいました。ボッティチェッリのこの代表作は、根源的に了解不能で、最終的には背筋が寒くなるとしか言いようのないものです。何度も足を運んだことのある美術館ですが、でも見る度に実感するのは、こちらの理解力が増すに従って「ああ、分かった」と思えるのではなく、逆に謎が深まっていくということでした。

アーティストの道を目ざす皆さんに言いたいのは、論理を大切にしてほしいということです。そう、謎めいたものへの甘えた心情を切り捨て、真の謎を見据えるために。来年開催される「あいちトリエンナーレ」では公募審査部門も設ける予定ですが、こちらの“背筋が寒くなる”ような作品による挑戦を期待しています。